午前６時、鍵を開けて、部屋のなかに入る。

ノートや雑誌やCDやテープ、ファンのコからもらったぬいぐるみや手紙がどっさり入ったバッグをリビングに置くと、YUKIはすぐにカーテンを閉めた。少しでも眠っておきたいのに、５月の朝はあっけないほど早く、やってくる。

『オールナイトニッポン』の２部を始めてからというもの、さすがのYUKIも体力の温存というものを考えるようになった。

週に一度とはいえ、夜中の３時から５時という時間帯を自由に使えないのはきつい。喉も体も疲れ果て、なのに、頭ばかりが冴えてしまって、放送が終わり家に帰ったあともなかなか寝つけないのだった。

シャワーを浴びると、缶ビールを片手に寝室へ入る。

ここ、深沢へ越してきて初めて、リビングと寝室とがセパレーツの部屋に暮らせるようになった。

去年の7月のパワステ2DAYSのその初日、前に住んでいた三軒茶屋のマンションの水道管が壊れて部屋のなかが水浸しになるという災難に遭い、しばらくホテル暮らしをしたあとで、この部屋へ越してきた。

衣類も家具も電化製品も全部水にやられてしまい、家財道具は一新。

しかし作詞ノートや日記、手紙、写真といった思い出のものたちは、もうどうにもならない。デビューが決まったお祝いにと、父親がプレゼントしてくれたオーディオやビデオもダメになってしまった。

唯一の生存物は、新しい部屋の寝室に置いてあるこのテレビだけだ。

（おっ、かかってるよー。また流れてる! こんなに朝早い時間帯にも流れてるんだね、このコマーシャルって）

ベッドにもぐり込み、なんとはなしに眺めていたテレビから、自分の声が聞こえる。

（いい曲だなあ。こんなに素直に、こんなに普通にうたえる歌って、そんなにないのかもしれないな）

自分たちの曲をひとり自画自賛して、ごくりとビールを飲み干す。

この曲が車のCM曲として起用されると聞いたとき、YUKIやメンバーは、さして特別なプレッシャーを感じなかった。

サウンドの作りに関してはYUKIはそれほど詳しくないが、これがいちばんストレートな楽曲であることぐらいわかっていた。

（J・A・Mでこういう曲って、ありなのかな？）

あまりのシンプルさに、最初はそう感じたほどである。

曲はするりとYUKIのなかに入り込み、すぐに詞が出来た。

「マネジ、やっぱり<バギーバギー>ってタイトルじゃダメかな？」

「YUKIちゃん、バギーじゃダメだよ」

「んー。好きなんだけどなぁ。バギーって単語もこのタイトルも」

一瞬そこで悩んだぐらいで、歌入れも驚くほど速く終わった。

それが、今テレビから流れている、「Over Drive」だった。

「この曲いい！演りたい！すぐ録ろうよ」

どれを「Over Drive」の次のシングルにしようかと話し合っているとき、恩田が持ってきた曲を聴いてYUKIはすぐにそう言った。初のヒット曲に続くシングル、だからといって、妙な気負いなどなかった。

<長い髪に憧れた 夜に降る雨は好きだった>

メロディを聴いていると、次々に言葉が出てくる。景色が浮かぶ。

夏の終わり、吹いてくる風がTシャツの背中を膨らませた。プールで泳いだあとのすべすべの肌に、綿シャツの乾いた感触が気持ちいい。帰り道はいつもちょっとだるくって、電車に乗るとすぐにみんな眠りこけた……。

思い出がいっぺんにこぼれ出していく。

姉と大喧嘩して捨てた日記も、水浸しのあの部屋でぷかぷか浮かんでいた日記も、今はもうYUKIの手元にないけれど、心のなかに留まっていた懐かしい感触がメロディに呼び出されていく。

（消えてくものの、せつなさ。その儚さ。だからこんなに、焦がれるんだ。大切にしたいって、強く思うんだ）

「Over Drive」に続くシングル曲「ドキドキ」の仕上がりに、YUKIは満足していた。

（「Over Drive」と「ドキドキ」。よし、じゃあ、こいつらの周りを固めるヤツらを作っていこう!）

3rdアルバムを作るにあたって、向かう先が決まったような気がした。バンドにはまだまだほかにもいい曲がある。あとはデモ・テープのなかからどれを選曲し、どう仕上げていくか、だ。

けれども、(どうしてだろう……?) YUKIはなぜか、ピンとこないものを感じていた。

「このアルバム、絶対イケる!」

「こーんないいもの作っちゃって、どうする? 俺ら」

「ホントだよ。次、どうしようか?」

１年前の夏、旭川を走るロケバスのなかで『ORANGE SUNSHINE』を聴いたときの興奮を、YUKIは思い出していたのだ。

(“こんなにいいものって、もう作れないかもしれない”って、あのとき思ったことがホントになったら……どうしよう……?)

嫌な予感に、縛られそうになる。『ORANGE SUNSHINE』を超えるアルバムはもう作れない、いや、作ってみせる、という矛盾した感情に、苛まれていく。名作を生み続けるための、アーティストとしての葛藤の始まりだった。